海洋ゴミを媒介とした音楽の歴史の追体験

パーカッショニスト・楽器製作家
海洋ゴミ楽器集団 ゴミンゾク 代表
大表　史明

はじめに

皆さんは『海洋ゴミ楽器』という慣れない造語を聞くと、何を連想するでしょうか。
おそらく『ゴミ』と聞くと、大半の方が至極当然のことながらネガティブな想像をするでしょう。また、ゴミから作った楽器なんて良い音がする訳が無いと考える方が圧倒的多数かと思います。私達も同じく年々増え続ける一方の海洋ゴミは可能な限り減らすべきであるという考えを持っていますが、では、ゴミというものの正体はいったい何でしょうか？

私達はゴミというものは物質の名前ではなく概念であり資源とゴミの線引きをしているのは自分達であるという考えから海に流出している、いわゆる海洋ゴミ・漂着ゴミの中から音楽家としての観点で、まだ資源として使えるものを探し出して、ゴミと呼ばれている最低の素材を元にプロフェッショナル仕様の楽器を製作し最高のアンサンブルを産み出すというプロジェクトにチャレンジすべく『海洋ゴミ楽器集団 ゴミンゾク』という集団を立ち上げました。

私達の演奏に使用している楽器はその材料の大半が海洋ゴミ由来のもので、世界各地の民族楽器を参考にして製作しています。(例えば楽器の弦は釣糸、漂着ブイは共鳴胴になるひょうたんの代わり。ペットボトルのキャップは溶かしてギターの板にするなど。)

民族楽器というものは、地域によっては、まだ諸外国との交易もなかった時代から受け継がれてきたものも多く、かつて楽器はその土地で育まれた材料を中心に工夫して作られ、音楽はその楽器の演奏により紡がれていたため、その土地の文化で醸成された個性が色濃く出ています。私達はその楽器の素材を得られるシチュエーションを国・地域ではなく海で拾った海洋ゴミという括りに限定する事で現代の地球に存在する民族楽器同様、楽器に独特の個性が宿るのでは。そして海洋ゴミから製作した楽器から最高のアンサンブルを産み出すことが出来ればもっと世間にゴミ問題というものに関心を持ってもらえるのではないかと考えました。

▲海洋ゴミ楽器集団ゴミンゾク

音楽の歴史の追体験

音楽は原点をたどると、その黎明期は手拍子や歌、そして身近な自然の中にある木や石など何も加工されていない物質その物を叩いたりして奏でられていたことは想像に難くありません。そのうちに人間が道具を作れるようになると狩猟用の弓などからヒントを得て弦楽器が生まれ動物の皮を加工するために木枠や土器などに張ったものから太鼓が生まれたり人類は新しい音を発見すると、その原理を発展させて楽器を作り、そしてそれをまた発展させていくという行為を繰り返してきました。私達もそれに習い、人類の音楽・楽器の歴史を海洋ゴミという素材を使って追体験してみる事にしたのです。

まず、最初の段階では拾ったゴミそのものを叩いて音が響くかどうかの確認作業から始まりました。本来洗剤の容器やポリタンクなどは中に空洞があるため、叩くと液体の注ぎ口がサウンドホールとなり、ある程度の響きが得られますがプラスチックは元の特性として紫外線に弱い傾向がみられ、実際砂浜には粉々になっているプラスチックも多く落ちているので長年海をさまよっていた物はその耐久性が懸念されました。ただ、何度もゴミ拾いを重ねていくうちに意外にも生活の中で使っているものと遜色のない程の弾力を維持したプラスチックも大量に落ちており、劣化が表層だけにとどまったものも数多く見受けられました。結果、海に落ちているプラスチックでも物によっては耐久性があり音が鳴りそうなものも結構ある事が分かりました。しかし、この段階ではまだ音楽的には拾ったゴミそのものを叩くという原始的な形でしか演奏出来ません。そこで次に私達はより多様な音色の出せる楽器を作るために世界中に分布している民族楽器のパーツに形や特性が似ているものを探し出す事にしました。

民族楽器の材料として多く使われている物には硬質な木材等はもちろんの事、頑丈かつ軽量で加工がしやすく、かつ内部に共鳴させるための空洞が得られる竹・葦や瓢箪等が挙げられますが、私達は海辺に大量に落ちているプラスチックゴミが多種多様である所に目を付けて、特に外国からも大量のゴミが漂着している日本海側へゴミ拾いに向かいました。

私は石川県の海沿いの町で少年時代を過ごし身近にあるもので玩具を作ってくれた父親の影響で毎日工作をしたり、仲間と海で遊んだりして過ごしました。その当時の海に落ちているものは空き缶やドラム缶などの金属容器や現在ではプラスチックで作られているブイ（浮き）等もガラス製のものが多く、当時はドラム缶で流木などを燃やし、そこで採れた貝などを焼いたりして食べたりしていたので拾ったゴミの記憶も割と鮮明に残っていたのですが、それから約 30 年の月日が経ち、楽器を作る材料を集めに訪れた懐かしの浜辺の様子は一変していました。子どもの頃私の目に映った海にも沢山ゴミは落ちていましたが生活の中のあらゆるものがこの数十年でプラスチック製品に置き換わった事で海に流出するゴミの質と量が激変し、

▲漂着ゴミの現状（石川県白山市）

砂浜が溢れるプラスチックでものすごくカラフルになっていたのです。私はその光景を目の当たりにして、そのあまりのゴミの量に愕然として悲しみを覚えたのと同時に、そのカラフルさが時々綺麗に見えたり、音楽家としての支点からどんな楽器をそのゴミから作ろうかと少しワクワクして罪悪感を覚えたりと、複雑な感情になりながらゴミ拾いをしていたのを覚えています。結果、日本では本来手に入らない規格外のプラスチックゴミがたくさん手に入り、外国からも大量に漂着しているブイ(浮き)はアフリカで育つ巨大な瓢箪の代用品として。牡蠣の養殖で使われている中空のパイプや水道管等は竹や葦の代用品として。そして楽器の弦には古くから動物の皮や腸・絹糸などが使われてきましたがこれも、釣り場などで絡まって落ちているナイロン製の釣糸が使える事が判明したので、私は漂着ブイ・流木・釣り糸を組み合わせる事で西アフリカはギニア共和国のハープリュート『カメレンゴニ』を模した弦楽器（弦鳴楽器）を作る事に成功したのです。

　そしてその時点で海洋ゴミから作ることが出来る楽器の弦はほとんど釣糸頼りであった為、釣糸から沢山の種類の音色が出る弦楽器を作るために、今度はその発音原理・演奏方法に着目しました。

弦楽器と一言に言っても、世界には数百に及ぶほどの楽器が分布していますがその楽器の発音原理の多くは
撥弦楽器（ギター・三味線など）
擦弦楽器（ヴァイオリン・馬頭琴など）
打弦楽器（ピアノ・ハンマーダルシマーなど）
の３つに分類されます。
つまり弦を弾くのか、擦るのか、叩くのかで、全く同じ釣り糸を弦として使用してもその奏法によって、全然違うキャラクターの音色が出る楽器を作ることが出来ると考えたのです。

これにより、最初のとっかかりとして西アフリカのハープリュートの様な楽器を製作する事に成功し、拾った釣り糸からしっかりとした音が出る事を確信した私は、次に同じ釣り糸を使って三味線タイプの楽器を製作。今度は釣り竿をしならせたものに釣り糸を大量に張って弓を製作し、馬頭琴のような楽器に着手。その次はさらに三味線製作で得た知見をもとに棹にフレットを足してギターの様な楽器を作ったり、馬頭琴で得た知見を元に、同じ擦弦楽器であるヴァイオリンを製作したりと多種多様な楽器の中に構造の似ている点を見つけて、どんどん製作出来る楽器のバリエーションを増やしていきました。

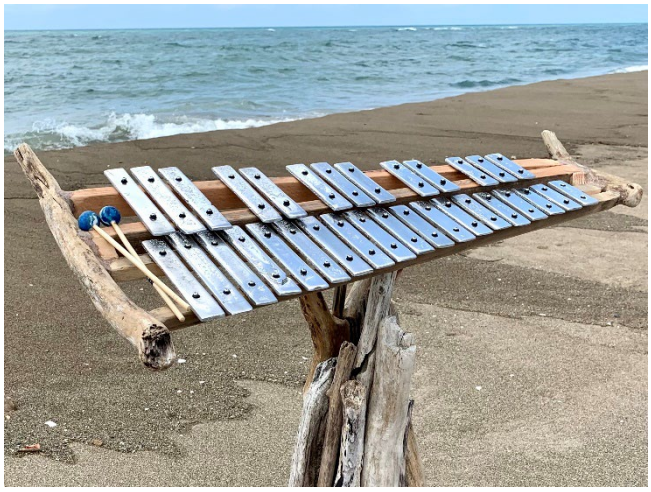
▲多種多様な海洋ゴミ楽器

素材の形から素材の成分へ

そんなこんなで私はたくさんの種類の楽器を作る事に成功しましたが、こうなってくると、次に作る楽器はどんどんと複雑なパーツが必要になってきます。楽器を作るために欲しい形のパーツがどれだけゴミ拾いをしても手に入りづらくなってきたので、ゴミ拾いをしながら考えていたところ、今度はゴミ拾いの際にいつも大量に落ちているペットボトルのキャップやアルミ缶のある特性に気が付きました。それはどちらも『熱可塑性』という特徴を持っているということでした。

プラスチック製品や空き缶は、製品として加工される際に元の素材を溶かして加工されるわけですがリサイクルされる際も同様に溶かしてから別の製品として生まれ変わります。この性質を利用して、私はペットボトルのキャップから楽器に使用する板を作ることが出来て、他にも紀元前から使われている簡易的な鋳造技術を学ぶことにより、アルミ缶を溶かして鉄琴を作る事に成功しました。

▲ペットボトルのキャップを溶かして作ったギター



▲ポイ捨てされていたアルミ缶を溶かして作った鉄琴

この活動を始めた当初は、私の専門である西アフリカのいわゆる木琴や原始的なハープなどしか製作できなかったため、しばらくの間はずっと西アフリカの楽曲ベースでのコンサートを開いていたのですが、試行錯誤を重ねて三味線や馬頭琴タイプの楽器を製作したことにより少しずつアフリカ以外の民族音楽が演奏出来るようになり三味線製作などで培った技術を生かしてギターを製作した際には自分達の音楽にコード（和音）の概念が生まれ、現代曲も演奏出来るようになりました。近年では、鉄琴やヴァイオリンの製作に成功したことでクラシックの曲なども徐々に演奏出来るようになってきており、海洋ゴミから楽器製作をすることで人類音楽の歴史をピンポイントで追体験しているわけですが、楽器の謎を紐解けば紐解くほど人類が歴史の中で、いかに音というものと向き合ってきたかというのを考えさせられました。

そして現在、5 年間かけて海洋ゴミから作る事の出来た楽器は約 40 種類。人類が培ってきた叡智を学ぶことでアイディア次第では海洋ゴミからでもこんなにも多種多様な楽器を製作する事が可能なのです。

物の価値とは

私が考えるに、楽器というものにおいて大切な要素はいくつかありますが、その一つに製作者と演奏者が共にその原理や仕組みを真に理解する事が挙げられます。
如何に質の良い材料を使うかというのは楽器製作にとって確かに大切な要素の 1 つではありますが、材料の値段が張るものは、単純に音の要素だけではなく、その希少性や骨董・美術的な価値も付加されているものもあり、どのポイントにその物の価値があるかを自分自身で見極めるというのは非常に重要な事です。例え良い材料を使っていたとしても、その素材を生かす術を知らなければ良い楽器を作ることは出来ません。逆に楽器の発音原理を真に理解して正しい場所に似た性質の素材を配置してあげる事が出来れば他の材料で代用したとしても近しい音色の楽器を作ることは出来ます。そして、ほとんどの楽器は人の手で奏でられて初めて音楽を作ることが出来ます。どんなに良い楽器でも、その楽器を初めて触る人が出す音と安い楽器でも真に楽器を理解している奏者が演奏する音ではどちらが良い音楽を奏でられるのかは、考えるまでもありません。

この活動を始めてから、私は物の価値というものは、例えば砂漠で遭難した人にとってはコップ 1 杯の水が金よりも価値があるように見る角度や置かれているシチュエーションによって変わるという事を強く感じました。

プラスチックはその加工・着色のしやすさで大量生産に向いており、そこそこ頑丈で、かつ安価であることから誕生から 190 年余りで世界中のあらゆる物に置き換わってきました。そして技術の発展と共に物や情報があふれ、大抵の物が簡単に手に入るようになった現在、工夫をする心や人々が物に対して感じる価値というのはかなり薄れているように感じています。こんな時代だからこそ、物の価値を考える心を改めて育む事はかなり大切な事ではないでしょうか。

おわりに

私達は音楽を追求する過程でたまたまゴミ問題と向き合うことになりましたが、海洋ゴミから楽器を作る事で大変多くの事を学びました。現在私達は先人が紡いできた技術の最先端の世界に住んでいて、それは生活の中に溶け込んでいるので当たり前のように使っていますが、私は当たり前が当たり前で無かった時代に思いを馳せて、その技術や物がどうやって生まれたか、その歴史を知る事でそれがいかにありがたい事であるかを感じることが出来て物への感謝が生まれると考えています。
私は、音楽への探求心から始まった活動ではありますが、海洋ゴミから楽器を作る上で得た物事を違った視点から見てみる事の大切さを伝えていくためにもこの楽器を作り続け、いつの日かこの楽器の音色が聴けなくなる未来を願うという音楽家としての矛盾を抱えながらこれからも海洋ゴミ楽器によるアンサンブルを追求していきたいと思います。